

カラオケが苦しみから楽しみに 5S（精神、整理、整頓、清潔、清掃）

伊東和樹が音痴だと気づいたのは小学生頃、気分良く歌っていたら、横の子が「音が外れている」と言った。そうなんだと思った。中学の時、試験で歌わされたが、もちろん通信簿が一番下だった。高校では音楽、美術、書道の選択で、美術を取りたかったが、校長先生をしていた叔父が、「美術は課題作成があり大変だから、書道が良い」と言われ書道を選択した。1時間の授業中、先生の話聞きながら墨摺りして後の30分は書くだけだった。大学では無理やり歌わされたのは将棋部に入った時の歓迎会であった。それ以外に歌わされた記憶はなかった。

伊東和樹は大学院試験を受けた。クラスの2/3は大学院に進んでいた。1年先輩は就職が決まった後にオイルショックが起こり、中には入社待機の人も出た。オイルショックの影響をもろに受けたのが、和樹の世代だった。和樹の世代は損な世代とも言えた。1年下は教科書無料、国立大学の年間授業料12,000円が36,000円と3倍になった。そして大学院の入学試験は例年の3倍になった。多くの会社が採用を控えたため、教員試験、公務員試験も3倍になった。和樹も高校理科の免許を取っていた。大学院の試験は落ちたと思った。終わった後、「あーあ、1年研究生でいないといけないか」と自分に納得させるのに時間がかかった。もう就職活動も教員も公務員試験も終わっていたのである。ところが、教授から電話があり、「受かった」と。面接は形だけだった。有機化学専攻の大学院だったが、その有機化学が悪く、物理化学がよくて、奨学金まで貰える順位だった。面接で他の教授から「君、有機化学専攻なのに、有機化学が悪くて物理化学が良いんだね」と言われた。物理化学は問題を見た時わからなかった。あーでもないこーでもないとうなっていたら、糸口が見つかり、そこから回答まで導くことができた。難しくても他の学生はほとんどできなかったようである。実は有機化学の問題の一つ(10点)は難しくなかったが、“モルホリン”の化学式がわからないと解けない問題だった。同じ研究室(産研)にいた3人はできなかったが、学部の研究室にいた受験生の多くは偶然、そのモルホリンを数日前に知る機会があった。その差(10点)が大きく、同じ研究室の1人は落ち、もう一人はぎりぎりだった。合格に数点を争っていたので出る問題によって人生が大きく左右される。大学院試験の後の生物化学の試験問題が難しく、クラスで和樹しかできなかった。この問題も和樹はあーでもないこーでもないと悩みながら構造式を推定した。生物化学の教授が、「この問題を大学院の試験にするか最後まで決めかねた問題だった」と説明していた。和樹は当然“優”を取った。この問題が大学院の試験に出ていたら、トップで合格していたのにと考えた。出る問題に左右されるというか、これも運なのかもしれない。そういえば、和樹が大学受験日前に見た英語の発音記号の問題が数題出て、それだけで6点ほど稼いだ。

会社に入ると、新人は労働組合の会合時、「がんばろう。突き上げる空に……」の最初を歌わされた。音痴が製造所300人(幹部除く)に分かってしまった。とても嫌だったが断れ

なかった。新人は全員寮に入らされ、寮の歓迎会では、歌とコップでお酒を飲まされた。歌を知らないで、「月が出た出た月が出た……」を歌ったがそこでも音痴が知れ渡ってしまった。なぜ、歌いたくない人に無理やり歌わせるのか？ 今ならパワハラである。あるとき職場での懇親会では歌わされ、仕方なしに「こぶし咲く、北国の……」を歌ったら、マイクを取り上げられた。取り上げられたことは「なんだ！」と思ったが、歌わなくてよいのでほっとした。

結婚して一戸建てに移ったら、町内会の懇親会があり、そこでも断ったが断り切れずに、「小さな指輪が回る……」を歌った。

飲み会になると常にカラオケ、それからは徹底して断った。

38歳の時に、胃がんになり、胃を2/3切除した。同じ頃、逸見政孝アナウンサーがスキルス性胃がんで亡くなった。自分はなぜ胃がんになったのか？ スキルス性胃がんでなかったのか？ 答えはでない。視点を変えると「どうして今までがんにならなかったのか？」ともいえる。和樹はがんになって人生は有限だということを実感した。今やりたいことが将来やれる保証はないと痛感した。それと周りの目よりも自分の心の目を大切にしたいと思った。和樹はその頃、80~100時間/月残業していたが、学生の頃からやりたいと思うボランティアをしてみたいと思っていた。退職してからやろうと思っていた。そのボランティアをやるには1年間毎週2時間研修を修得する必要があり無理だと思ったが、やってみることにした。出来なかったらそれだけのこと。結局できてボランティアを始めた。

もう一つは、苦手なことや知らないことにチャレンジしたいと思った。そのチャレンジの一つがカラオケだった。逃げてばかりいたカラオケをやることにした。たまたま、社会保険センターのカラオケの案内に「歌が苦手な人、ボイストレーニングから(2時間×2回/月)」との説明があり、これは音痴を直してくれる教室だと思った。しかし、やってみると、カラオケが好きな人や上手い人が、ボイストレーニングしてさらに上手くなりたい人が集まっていた。和樹と同じように勘違いしていたもう一人がいた。和樹とよい勝負の音痴だった。和樹は自分の歌が外れているのは分からないが、人が外れているかどうかはわかった。一人でないのは心強かった。その音痴の人は1年ほどで止めていったが、和樹は頑張った。そして一人カラオケにも行き、練習を積み重ねた。カラオケ教室250時間、一人カラオケ250時間やったころには、自分の歌が外れていることに気付くようになったのと、人前で歌う度胸だけはついた。

和樹の仕事の品質保証では、5Sを大切にしている。整理、整頓、清掃、清潔、躰の5Sである。しかし、和樹は”躰”の言葉が嫌いだった。躰とは上が下にルールを守れと言っているようで、言っている上司の躰はどうなんだ！と思っていた。

また退職と同時に学び始めたロゴセラピーでは、精神が心と身体の上位に位置づけ、この精神、考え方が大きいと学んだ。京セラの創業者稲盛和夫著「生き方」に下記の式がある。

結果（パフォーマンス）＝考え方×熱意×能力

一番大切なのは考え方で、二番目が熱意、能力はそれに伴って来るという、稲盛氏が会社の仕事で実感したことであり、それを実践して来られたから言える言葉であった。

トラブル防止、効率化では先ずは5Sの徹底が言われている。5S活動で品質向上&コスト削減の取り組みもある。和樹は驍を精神に置き換えてセミナーや講演で伝えている。福井県の製薬企業でSOP(手順書)違反が健康被害を引き起こした。多くの医薬品製造所でもSOP違反が起きている。SOPを自ら守りたいとの考え、精神が大きいのである。音痴は治らないと諦める考え、何とかなるとの考え、まさに”精神”が結果を左右することを和樹はカラオケで学んだ。

自分はダメだと思ふとダメ。自分は大丈夫だと思ふと大丈夫。自分はできないと諦めるとできないまま。何とかなると思つたらなんとかなるのである。和樹がカラオケにそこまで時間を注いだのは、カラオケが音痴なのに好きだったからである。また歌っていたのが楽しかったからである。

好きは知るに如かず・・・知るは好きに負ける

好きは楽しむに如かず・・・好きは楽しむに負ける

やることを好きになること、できればそれを楽しむことができるように工夫することが必要なんだと、和樹はカラオケから学んだ。

和樹はカラオケを学ぶ前から腹式呼吸で歌えていた。そのため、8時間ずーっと一人カラオケで歌っても声が枯れることはなかった。それはセミナーで5時間話すのを3日/週行っても、声が枯れることはなかった。これもカラオケで自分を知ったのである。和樹はカラオケの学びで得て、腹話術教室に通ったり、泥鰌掬いを習った。泥鰌掬いは三段まで得た。和樹は腹話術や泥鰌掬いを会社で披露した。和樹はコミュニケーション苦手で、人前で話をするのも苦手、ましてや何か芸をするなんて考えられなかった。でもやればできることを学んだ。きっと大学までの和樹を知っている人と、その後の和樹を知っている人の、和樹のイメージはかなり違っていると和樹は思うことがある。そしてどっちが自分なんだろうと和樹自身が分からなくなっていた。